



Title	Gallia 55号 卒業論文要旨
Author(s)	
Citation	Gallia. 2016, 55, p. 191-194
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61944
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

卒業論文要旨

コレット『牝猫』における作家と主人公

板倉奈緒

1933年に発表された『牝猫』*La Chatte*は、作者コレットの円熟期の傑作として知られる。作品の主人公アランは、幼馴染のカミーユと結婚するが、自身とは正反対の性質をもつ彼女とのパリでの新生活に馴染むことができない。加えて彼が心から愛する牝猫サアへのカミーユの激しい嫉妬に悩まされ、アランは生まれ育った実家に帰ることを決意する。「純なるもの」の中に居場所を見出すアランの人物像は、生涯、とりわけその文学創作の中で、「純なるもの」を希求したコレット自身に重なる。

第一章では、『牝猫』におけるアランと、1936年に出版された回想録『わたしの修業時代』*Mes apprentissages*におけるコレット自身との比較を行う。『わたしの修業時代』では、コレットと、彼女に匿名での創作活動を強いた最初の夫ウィリーとの結婚生活の破局が語られる。『牝猫』と『わたしの修行時代』、二つの作品を比較することで、アランと「修業時代」のコレットとの間に、自然との結びつき・都会への嫌悪・感覚の一致・過去への愛着といった共通点が見出される。さらにアランの、「純なるもの」の世界を象徴する実家の庭で、サアと共に生きていくという決断は、ウィリーと決別し自分自身の文学人生を歩むという、若き日の作家コレットの決意を想起

させる。これらの共通点は、作品の主人公が、作家の青春時代とウィリーとの夫婦生活を表しているということを示す。

第二章では、独立した作家としてのコレットと、牝猫サアとの関係を分析する。サアは、コレットの文学において最も重要な概念、「純なるもの」の象徴であるが、更に、時として人間よりもむしろ動物に近い存在であったコレットの性質から、円熟期の作家コレット自身、あるいは彼女の文学そのものをも象徴する存在であると考えられる。

『牝猫』最後の場面は、人間であるはずのアランが、あたかも猫に変化してしまったかの様な描写で締めくくられる。これはアランとサアが、単に深い絆で結ばれていただけでなく、むしろ人間と猫という種の違いを超越して、同化してしまったことを示している。第三章では、この同化について考察し、『牝猫』の結末が、コレットがウィリーの匿名の共同執筆者としてではなく、自分自身の為に作品を書き始めた瞬間を表すものであると結論づける。

作家と主人公の関係が示すように、『牝猫』は、コレットの文学人生の探求と発見の物語であると考えられる。

『夜間飛行』における葛藤と決断

西本慎之介

本稿ではサン＝テグジュペリの小説『夜間飛行』において、登場人物の葛藤

が果たす役割を明らかにした。『夜間飛行』は1931年に出版された小説で、作者サン＝テグジュペリの飛行士としての体験をもとに書かれている。この小説では、夜間飛行の黎明期において、苛酷な業務を通じて、登場人物達が人間同士の連帯や人生の意味といった本質的な価値にたどりつく様子が描かれる。本稿では、主人公の一人である支配人リヴィエールの心理的な葛藤に着目した。

葛藤を「心の中に相反する欲求が同時に起こっていること」と定義すると、リヴィエールには三つの異なる葛藤が存在する。彼は葛藤を、思考を抽象化することで克服しようとする。彼は第一、第二の葛藤の克服に成功したといえるが第三の葛藤の克服には失敗する。しかし、第三の葛藤の克服によって、小説のテーマである生の肯定、すなわち人生に意味を与えることが可能になっていると考えられる。

第一の葛藤とは、リヴィエールの理想の老後と現実の老後の対立である。長年苛酷な業務に従事するリヴィエールは「自分が老いた時には平和「paix」が実現されている」という理想の老後を夢んでいた。しかし自分の老いを自覚した時、「自分が老いても平和「paix」は実現されていない」という現実の老後を悟るのである。リヴィエールはこの理想と現実の葛藤を理想の老後を諦めることで克服した。そのために、彼は自分と同じように仕事漬けの人生を送る部下から、「人生を仕事に捧げる満足感」という共通点を見出し、「自分も人生に満足を感じている」と思い込むことで第一の葛藤を克服する。

第二の葛藤は、リヴィエールの部下についての葛藤であった。それは失敗をした部下のロブレを解雇するか否かについての葛藤であった。リヴィエールは思考の抽象化によって「ロブレは憐れむべきだが、会社にとっては不利益をもたらす悪であり、解雇するべきだ」という心境で葛藤を克服し、ロブレの解雇を断行する。

第三の葛藤は、生「la vie」についての葛藤である。それは、行動「action」という要素と個人的幸福「bonheur individuel」という要素の対立である。リヴィエールにとって、個人的幸福は遭難したファビアン及びその妻の家庭の幸せを意味する。行動は事故を引き起こした夜間飛行事業を意味する。リヴィエールの行動によってファビアン夫妻の個人的幸福が破壊されることが、葛藤を引き起こす。葛藤が生じる原因は、リヴィエールの認識の中で、これら矛盾する二つの要素の共通の前提として生「la vie」という概念があることである。リヴィエールはこの生「la vie」を超越することで葛藤の克服を試みるが、失敗する。しかし、リヴィエールが葛藤の克服に失敗することで、生「la vie」という概念が肯定されていると考えられる。

以上のように物語における三つの葛藤の構造を前提とすると、とりわけ第三の葛藤は他の葛藤に比べて重要な位置を占めていると考えられる。全ての葛藤に共通する要素はリヴィエールの夜間飛行事業を優先する決断である。この決断が影響を及ぼす範囲という点から葛藤の関係が整理できる。第三の葛藤における決断が影響を与える範囲は、他の葛藤に比べ

て広いと考えられる。したがって、第三の葛藤を物語の中では、とりわけ重要だと考えられる。つまり第三の葛藤克服の失敗が意味する生の肯定を重視し、小説全体のテーマとすることは妥当であると考えられる。以上から、本稿ではリヴィエールの葛藤を分析することで、小説『夜間飛行』のテーマが生肯定であり、それはリヴィエールが第三の葛藤の克服に失敗することで成功したと考えられることを示した。

マルセル・ブルースト『失われた時を求めて』における音楽作品の機能—ヴァントゥイユの「七重奏曲」を中心に—

森 康 晃

マルセル・ブルーストは、自作品である『失われた時を求めて』の第五篇『囚われの女』において、音楽家のヴァントゥイユという人物が作曲した「七重奏曲」を登場させている。ただ、「七重奏曲」に関する記述については、ブルーストが『囚われの女』以降の文章を修正中に世を去ったこともあり、はっきりしない部分が多い。「七重奏曲」の楽器編成は、ヴァイオリン、チェロ、ハーブ、ピアノ、フルート、オーボエであることはテキストに書かれているのだが、七番目となるべき楽器は「金管楽器 *les cuivres*」としか示されていない。そのために今日まで、この「金管楽器」が具体的にどの金管楽器を指すのか、またそれは何本なのかについて様々な説が提示されており、さらには生成研究の見地から、現在「七重奏曲」とされている楽曲

は、ブルーストの意図に基づく「六重奏曲」であり、「金管楽器」を含まないとする学説も出されている。

本論においては、まず楽器編成について、ヴァントゥイユの「七重奏曲」と、ブルーストが知っていたと考えられる実際の作曲家、ベートーヴェン、サン＝サーンス、ラヴェルの三者による七重奏曲とを比較検討すると、ヴァントゥイユの「七重奏曲」は弦楽合奏を基本にしておらず、ピアノにハーブという大型楽器を二台含んでいる点で非常に特徴的であることが明らかになった。

次に、ブルーストの草稿も含め、「七重奏曲」が演奏される場面に立ち返ると、「七」という数字や金管楽器は重要な要素であると考えられ、問題の作品は金管楽器もその演奏に加わる「七重奏曲」であると解釈するのが妥当である。また、ブルーストがその場面において、芸術家の独創性について論を展開し、「七重奏曲」自体が『失われた時を求めて』の主人公への文学創造の啓示になっているということも特筆すべきである。

さて、その「金管楽器」について、まず本数の問題だが、*les cuivres* という表現は、総称としての「金管楽器」を指している可能性もあるので、必ずしも複数の金管楽器を指しているわけではないと考えられる。また、具体的な楽器については、先行研究においてホルンを指すという説が出されていた。しかし、演奏場面の随所に見られる光や熱に関する言葉、トランペットの先祖である古楽器ブッキーナを用いた比喻、先述した「七重奏曲」自身が持つ文学創造の啓示としての役割、そしてテキストが想起させる

同時代の音楽作品を踏まえると、「金管楽器」とは一本のトランペットではないだろうか。

ただ、ブルーストが特定の金管楽器の名称ではなく「金管楽器」とだけ書き残している事実は大きい。ブルーストは個々の楽器の音色ではなく、それらの重なりによって生み出される交響的世界の方を重視したのである。